武家名目抄稿

甲冑部十二

十五

和書門
類 二五二の六
函 七七
架 四九
冊 四五六

内閣文庫
和書
類 二五二の六
號
冊 四の六
函 五三
架 一三

内閣文庫
番號 和 25206
冊數 457(323)
函號 153 275

国立公文書館
National Archives of Japan

武家名目抄稿第十五冊

甲冑部十二目録

卯花威鎧
下濃鎧
紅下濃鎧
唐紅下濃着長
紫下濃鎧
紺下濃鎧

国立公文書館
National Archives of Japan

端下濃鎧
村濃鎧 今元
紺村濃鎧
匂威
萠黄匂絲威鎧
萠黄匂鎧
萠黄匂腹巻
萠黄匂小腹巻

黄櫨匂鎧
紫匂胴丸
端匂

武家名目抄稿第十五冊

甲冑部十二

卯花威鎧

保元物語云白河殿攻落條志なのゝ国乃住人祢の井大弥太あおきりの直垂に卯の花おとしのよろひにおなし白き甲をきさめある
つるふあしろるゝ云々

義経記云はきのみえす此よふゝ此の条たうくもんいせん

三郎をめしてかさねおとし卯の花おどし
の酒を二人にもさせられけり
時に美濃国村雨花山院の大納言もろ
もとを山へはうらうして思ひ出門のそらし後あいこ
まに由にもてあいて後あはせ親王ことをこ
なし孫つくしたちの兵ものとものうこ見
ともあはせ孫そのほか大納言も大あう
のお産主殿高もうらうきものかふせる

に出あはせ孫ひ卯の花をそのよろひ
くるとこのうふとをもりて大条をつけてもお
ハもる

太平記云八幡合戦條土岐惡五郎ハ其比天下
ニ名ヲ知レタル大力ノ早ワサ打物取テ
達者也ケレハ卯ノ花威ノ鎧ニ鍬形打テ
水色ノ笠符吹流サセ五尺六寸ノ大太刀
抜テ引側メ射向ノ袖ヲ振カサヽラ云々

文正記云甲斐摠領千菊丸卯花縅鎧綿上
抓拖掛肩上
結城合戦物語云哉坂一揆のちん中より、
をえらる卯花おどしのよろひおなしけ
のうふとはをしめちゐきあるとゐなる
武者つきすみいていひけるふ云々
別所長治記云神吉城攻條大手ノ矢藏ノ扉不
殘開カセ年来廿八九ノ男卯ノ花威ノ鎧
キテ甲ヲ卸テ童ニ持セ皆紅ノ扇開テ大
音アケテ名乗ケルハ當城ノ大將ノ神吉
民部少輔ト云者也云々
矢嶋筆紙云ちゐとおるき人のそゝふは
ほをとめきれきんたちのそゝたりゝと
おつゝて卯のそおどしよろひとめ
あしらゐるゐしとつゝふて白めやたゝ
むてちゐまきしにむすとしめ云々

軍陣笠書云卯花おどし　ハウつ系事也色とハ白糸のおどしを也糸ハ白いろ〳〵まゝ有り

金言和歌集云夏の哥乃中にほとゝぎすハ陣屋のうしろ有まて卯花おどしぬきこやきてます

下濃鎧

ハ素材系云黄威卯花威小桜威格威火威

等華威黄橋白拵索目逆前茅肩白裾濃或取妻或取腰色〻絲縅〻革毛平唐後絲縅

郡左十候

紅下濃鎧

平治物語云新朝岸義兵條九郎は曹司ハ秀衡ら許に松りけるゝ佐殿まてに義兵をあけ給ふと支へしらハうち立給ふに到てひら〻ん地のいろきの歩兵にぐぐ卯おすそこの

曹司元〻

謹こうゝ作の太刀をそへてなる云こ
判官拍子云 判官右野義経 判官その日のかやうそく
にハあをちゝ ふ〳〵きをひきこれをぬぎ
ぬそこのゝ ゝぴゝ ゝのうふとの
をしゝ ゝこうゝ ゝつくりをゝ ゝ云こ
吾妻鏡云文治元年二月十九日先帝令出
内裡御前内府又相率一族等浮海上廷尉
着赤地錦直垂紅下濃鎧駕黒馬相率田代冠者信綱三人
等馳向汀
太平記云箱根竹下合戦條中ニモ道場坊助注記
祐覚ハ兒十人同宿三十餘人紅下濃ノ鎧
ヲ一様ニ着テ兒ハ紅梅ノ作リ花ヲ一枝
ツヽ甲ノ真額ニ挿タリ
又云本間孫四郎重氏黄瓦毛ナ
郎遠矢條
ル馬ノ太ク逞キニ紅下濃ノ鎧着テ只一
騎和田ノ御崎ノ波打際ニ馬打寄云々

唐紅下濃着長

長門本物語云 屏風合戦條 こゝに越つのおにまさ記うけて武ことゝて一き出きぬれあらちのかゝきの紅ゐ紅袴のきぬかゝに焉くろかるるのなまりりあるきふくもんのくゝときて踊をゝこゝ出来さきふくもんと平家のうにハかるとくろに紅をふもうして一院のはつうひけ

ゐいゝ女房所添義経をゝ名のりくる

紫下濃鎧

平治物語云 頼朝舉義兵并平家對治條 九郎御曹司ハ秀衡カ許ニオハシケルカ佐殿既ニ義兵ヲ舉給フト聞ヘシカハ打立給フニ秀衡紺地錦直垂ニ紅下濃鎧紅京師作紫金作太刀ヲ添テ奉ル馬ハ御用ニ随テ召ルヘシトソ申ケル

異本平治物語云 四裏勢 掛条 あくるあんうち
のふようきやう はいたやう 掛んせあうちの
ふしきせひしてまにむらさきせそこかよろひ
ふきくのまるをきふくしるをそうあの
をそうちうけるこうつくられたちを
きれたんてんのうえまのあけしふよ
りお殺へう
平家物語云 河原兄弟 九郎はさうしようつね
の子日はしやうそくふいあうちはふしき
乃ひきれりむらさきずそこ ぜよろひ
きてくふうりうるうとのそ右め
云々
又云 重衡 虜 條 本三位中将重衡ハ生田
森ハ副将軍ハすてはしるうを日ハ
装束ハはうちに白う芳なる糸をもつて
岩ハ村千多ぬふ ふ垂ハ紫にそこの

猩々ト畫子鹿毛ト云ヒ珍ラシ名馬ヲ孫弦
ヘリ
源平盛衰記云屋嶋合戦條判官ハ紺地ノ錦ノ
直垂ニ紫キ坐滋ノ鎧ニ鍬摸打タル白星
ノ甲ニ滋紅ノ布露カケテ廿四指タル小
中黒ノ征矢ニ金造ノ太刀ヲ帯キ云々
又云三河守知度ハ赤地ノ錦ノ直垂ニ紫
スリヲノ曹ニ黒鹿毛ナル馬ニ乗テ西ノ
山ノ麓ヲ北ニ向テ
太平記云関東大勢長崎悪四郎左衛門尉
上洛條
ハ別ノ侍大将ヲ承テ大手ヘ向ヒケルカ
態已カ勢ノ程ヲ人ニ被知トヤ思ケン一
日引サカリテソ向ヒケル其行装見物ノ
目ヲソ驚シケル中略纈纈ノ鎧直垂ニ精好
ノ大口ヲ張セ紫下濃ノ鎧ニ白星ノ五枚
甲ニハ龍ヲ金ニテ打テ著タルヲ猪頸ニ

著成ニ云々

庭訓往来云次武具事陸奥国産紫威紅糸緋青黄糸緋御甲威黒糸縅云々

按紫裾の下濃字を脱せるもの歟

遠倉大双郷云城義城條今度打立形の首を四十ヶ所着到を付られ実検を遂らるる也

大将上杉兵庫頭清方小具足ヲ以て出陣

八侍不長尾出雲守憲景紫下濃の腰の御

形の五枚甲云々

冨樫記云政親御年積テ世四長ノ高六尺八寸如丈六仁王ノ荒作也紫下濃ノ御着長四人持アルヲ取テ引掛淘テ上帯丁ト縮同毛ノ四方白ノ甲ニ大鍬形打猪頸ニ着成

紺下濃鎧

天正本関東大勢上洛條中ニモ長崎悪四郎左衛

門尉ハ別シテ侍大将ヲ兼テ大手ニ向ヒ
ケルカ態ト己カ勢ノ程ヲ人ニ知レント
ヤ思ヒケン一日引サカリテソ向ヒケル
元亨
ケル我身ハ其次ニ纈纈ノ鎧直垂ニ精好
大口ヲ張セ紺下濃ノ鎧ニ鎧ヲ白星ノ五
枚兜ニハ龍ヲ金ニテ打テツケタルヲ猪
頭ニ着ナシ云々

端下濃鎧

源平盛衰記云水嶋軍條越中二郎兵衛盛次ハ
重目結ノ直垂ニ耳坐滋ノ冑ヲ着セリ
會津陣物語云城ノ大将里見越後守耳坐
紺ノ鎧ニ月毛ノ馬ニ乗先陣ニ進下知シ
ケル

紺村濃鎧

長門本平家物語云熊谷平山城戸口寄条　熊谷二郎
玉實ハ褐衣の冑ひゝれに紺村濃のよろ

に紅の毎底らけてこん左ゝの毛と云つるに
馬鞍を紅てそのうゝ
白威
甲拾抄云何れの色ゝも下よりも又中
より上下つゝも井より左右つゝも肩妻つゝも薄
く白ゝなる也○下濃ノ不よりとハ生色
は濃き謂れなり濃ゝ濃ゝぬハ白ひなり
又云妻ゝなりゝも肩ゝ妻肩ゝ分て

弦かけにも威ゝに色ゝの糸ゝ妻ゝ
て互に白ゝなる也
萠黄匂絲威鎧
長門本平家物語云 彰考館 討条 桂竜の将維盛
ハ赤地の小しきに白ゝ
ハ紺地の錦ゝ
ぬゝとくきくまきいけ地の金覆

梅は鶯をきてゝあそびけり

源平盛衰記追討使門出條維盛ハ赤地ノ錦直垂ヲ大頸端袖ハ紺地ノ錦ニノタミレタル萠黄ノ匂ノ糸威鎧ニ金伏輪ヲ係タリ連錢葦毛ノ馬ノ太々逞ニ鑄係地ノ黄伏輪ノ鞍ヲキタリ

萠黄匂鎧

半井本保元物語白河殿夜討條伊豆六郎年十七死生ふ知の兵ふり萠黄匂の糧より三枚塊に深沓はき矢負三十箙の弓持鹿毛ふる馬ふ貝鳴こゑて云と

平治物語云源氏物語條ゑちこの中将ふりちゝりこん地のふしきの歩金よりもえき匂ひの糧をーのきそうふ物ら刈とる長ふくまんのたかをとちきこゝつゝらの甲をきける云こ

平家物語云 官位沙汰ノ事 ありあけ月かけ
やうやうほのぼのとしらむ程に
ちりぬるあやのひとへもの
めをはなつ
ふるまひをとこ
又云 敦盛 祐見ぬきまつるぬふるこ
きかさねきぬ
源平盛衰記云 敦盛上条 無官大夫敦盛ハ紺地
錦ノ直垂ニ菊黄匂ノ鎧ニ白星ノ甲着テ
滋藤ノ弓ニ十八差タル護田鳥尾ノ矢鏃
毛ノ馬ニ乗給ヒ只一騎新中納言ノ乗給
ヒヌル船ヲ志テ一町ハカリ游ヒテ浮又
沈ヌ漂ヒ給フ
又云 能成紫ノ取染ノ唐綾ノ直垂ニ萠黄
匂ノ鎧着テ白葦毛ノ馬ニ乗リケルニ判
官ノ後ニウチタリ
承久(下ナミウ)記云 京方ヨリ赤地ノ錦ノ直垂ニ萠

黄ニホヒノ鎧スソ金物打タルニ白星ノ
甲キリフノ矢負テ紅ノ母衣懸白葦毛ナ
ル馬ニ乗タル上臈君トノ人ト見ル所ニ
是ハ右衛門佐朝俊也
志田冢ヲ云女房色をそへてあたゝ軍の、
きょうしろつめしてとらせんとてゝつい
ときぬ きろとおろせハ志とりもしやる
いてたろゝ紅のきるはの志ゝふひきよ

ろひょもねあ冢しもぞきふおひのすろ
ひ冢あけおゝろこをかゝるもんたまろ
このこしをけのろうを志もしろをそ
うろゝしけ云こ
甲板ハ云菊木櫨のにをひハ春の芽出し
秋の黄葉に丹色いろを負ふをとゝたゝ榊木
も櫨も落色ゝにいろの落きに移るも
濃きに移るも又妻へも肩へもにほをそる

なり

萠黄匂腹巻

平家物語云 伝連合戦條 伝連ノ子孫ハ裝束ハいうにあらとの狩衣ハ萠黄匂ひの腹巻をきて懐刀をそ帯ける

忍ちし形ふたしらふらうとのちもさうの有をるものをとれ四しめもとれさしきおれ侍りもえきまゐひの後

まき絵くきすりふるにさろくとめ

萠黄匂小腹巻

承久記云治部次郎ヤノ壽王ニ物具セサセヨト云ケレハヤガテチヤウケンノ直垂小袴ニ萠黄ニホヒノ小腹巻ニ十五サシタルフメ羽ノ矢シゲ藤ノ弓ヲソモタセタル

黄櫨匂鎧

平治物語云 待賢門軍條 左馬つのかけ右けすり
八寸ませ三 今日は左将ゐまゐはあう地のかし
きり ゐしくまゐ。 のかぶひかのよろひ
ゐかをそうゐ物うつるふさりうらかり
うふとはとゝ志免ふうゐまとゐふ右カをたき
きをふの矢おひ右けとうは弓持をきつね
けあるつるふ柳極をうゐるうひくゐをせく
のり弦へり中暑 比をはは左将ゐ誰人うふのまき

くんうう中ハ清和天皇九代のこうゐんたるのう
ミ義朝のちやくゐ 鎌倉は恵源右義平と
中 左也 生年十五さいむさしの右郎の軍の
右将とゐくおち常カはえまようゐとう
ちゐようこれうゐ 長ゐは今戦ゐ一郎ふう
くカ名をとうは年はゐつを十九さいはんさん
とうゐ五百きのまんん中へはいゐ入西より左へ
おひまくり北より南へおひまくりとこはさは十文字

小歌をさつとけちらしてさむさやせかめる
うけそち将軍とくんぐんぐんぐんのぶ国ひの
よろひよりてふのすそかあはうつくきろきけ
のるふのつくることそ毛盛よとしふくへてく
んくおちをとりふせよとうちそれい云て
満田弓馬のかぶとさしと十三東永えとつうひよう
引くゑやうとそふつ毛盛のいむけの袖ふきる
とあくいてとひうへるやうくこれ矢をいたり
れいをしつけかちやうとあくいてのうりを
くくけくおとうかへきり悪源太義ゆる
ゆうはとゑよろひこさんあきてるをいそお
ちんぬ式うてとちせぶきれい文よつ引て
おひうけさゆふきれうくる紙いこと
り
長門の平家物語の図上関 唐皮小島といふ
浮世絵八陽盛にさろやうるくんのかくかそ

と中ハ暑さ〳〵ゟ
〳〵ゟ蓮ゟる蝶をうちたり　仲の色いとたと
しまハぬ〳〵先かそおもと也うをえし
てゟれハ虎の毛所ゟふあいよこれ是あに
其名をさ申〳〵うはとそふ法をゟれしゟ
と

拙全文ハ唐皮の条に引たり又源平盛
衰記第四十唐皮小烏拔丸の条も尺

へたり
又云小松殿ゟ諸父条　車ゟうちゟよういせうきこ
りけるもよ〳〵自ゟめ〳〵よ移ゟるむ〳〵さ切せの
よゟひ蓮華にたのふのふちひ蓮のよゟひとき
ゟ白星ゟかゟふと蓮をといふ雜ゟ長ゟひ
ふかけさせゟ〳〵
判官物語云　土佐房堀川へきさんこハうの花
ゟ記ゟさ記をはつとおりていろ〳〵なのえん

のきハ城ふしこうとをさしてを出ふること
にきつきけなる馬よりとるものもの
よろひのよろひきてるにいきをつうやく
ゆつえをすりてひうへたり
太平記云六波羅攻條爰ニ官軍ノ中ヨリ櫨白
ノ鎧ニ薄紫ノ母衣懸タル武者只一騎敵
ノ前ニ馬ヲ懸居テ高聲ニ名乗ケルハ其
其身数ヶ子ハ名ヲ知人ヨモアラシ是

ハ足利殿ノ御内ニ設樂五郎左衛門尉ト
申者也

紫匂胴丸

萬松院殿宛太記云卯月廿七日ヨハ有春卿
ヨ作ル義見城春山府君の墨城参らせり
土御門ノ参壇に棚を掛へ幣帛をたて
祭文城よみよりて宮物にハ紫ほひの胴
丸のもやうに成しあるヨ同しけの兜七星

遠にもてり如やしきて帰敬のまことなるべ
り如左の礼を尊らとして寿筭長久を
祈奉る

端句

長門国平家物語云 水嶋合戦條 のつゝ[illegible]
りの中暑船軍いやうあるあるりとて唐巻
漆の小袖り精好の大口に黒糸威の腰刀
すそくれあおに端ぶりのたるを着て

云云

武家名目抄稿第十五冊

明治十五年八月九日旧稿校正　小野由久

同年八月十六日再校再書　盛山宗阜

同年同月十九日以旧稿遂一校加朱點畢　塙忠韶

明治十六年十月　校　窪田鈴太郎

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan